

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】根岸尚代

【所属】(助成決定時) 千葉大学大学院園芸学研究科

【研究題目】「生きている戦争記憶遺産」としての戦災樹と防空緑地の研究

## 【研究の目的】

戦後 73 年が経とうとする現在、日常空間において戦争の記憶を今に伝えるものはほとんどなくなっており、同時に戦争を直接知る世代の高齢化により、その語部も数を減らしている。このような現状において、戦災の跡を視覚を通して伝えることのできる戦災樹の歴史的価値は年々増していると考えられ、申請者はこれまでに、東京大空襲でほぼ全域が焼け野原となった東京都の城東3区(台東区、墨田区、江東区)および地方戦災都市(北海道函館市、愛知県名古屋市)において調査を実施し、戦災樹の現状分析を行ってきた。本研究では、これまでの研究過程で新たに確認された防空緑地の現状把握を行ない、戦災樹および防災緑地など戦災の痕跡を残す緑地環境を、「生きている戦争記憶遺産」として地域社会および我が国全体で保全活用していく方策を確立させることを目的としている。

## 【研究の内容・方法】

本研究を行う中で新たに注目しているのは、戦前から戦中にかけて指定された防空緑地における戦災樹の存在である。防空緑地は昭和 12 年の防空法以降、「避難及び軍事上からも必要な施設」として位置付けられ、昭和 14 年から実地に都市計画決定された。戦災樹と防空緑地の具体的な関係性に気がついたのは、名古屋市街地の元防空緑地である白川公園での調査においてであったが、これまでの戦災樹が点的に存在する戦争記憶遺産であるとする、元防空緑地とそこに存在する戦災樹は、面的な広がりを持つ戦争記憶遺産として位置付けられる。これらを「生きている戦争記憶遺産」として保全するには、生長し続ける樹木本体や戦災樹を含む緑地全体の維持管理方法、そして、それらを保全活用する人間に焦点を当てた、戦災樹および防空緑地の有する歴史的価値と所在地域の結びつきに永続性をもたせるための方策を考えていくことが必要となる。その手順を以下(1)～(5)とする。

全国の戦災都市の中から、東京、名古屋を含む数都市を選定し(1)防空緑地の分布および現状についての資料収集をした後、実際に現地へ赴き(2)防空緑地における戦災樹の探索を実施。戦災樹は戦災焼失エリアの縁辺部に位置することが多く、損傷状態などから戦災樹であることが推測されるものであるが、戦災樹であることを確定するために必要な情報である樹齢を非破壊的方法で測定することは、事実上困難である。そのため最終的な確定には、その樹木や緑地が焼けたことを知る人にヒアリングをする必要がある。生き証人がわずかながら存在する今しかできない調査であるが、これまでの調査の経験から、80 歳を超えた高齢者でも実に生々しく戦争の記憶を有している人が多い。それらの記憶はモノとして残る戦災樹などとともに、後世に伝えるべき重要な戦争記憶遺産であると考えため、(3)ヒアリング調査による防空緑地と戦災樹の「記憶」収集を行う。以上の調査結果に基づき(4)分布図並びに保全マップを作成し、(5)今後の保全方法についての検討を進める。

## 【結論・考察】

東京、名古屋においては戦災樹の探索にすでに着手していたため、前述(3)のヒアリング調査を中心に実施した。新たな調査対象地として選定した大阪、京都、福井などの都市においては、(1)(2)の戦災樹の探索を中心とした調査を実施した。その結果、元防空緑地は戦後の都市化によりすでに市街化されてしまっている部分も多くあったが、現在は都市の貴重な緑地資源として残存していることが確認された。また元防空緑地内に新たな戦災樹の存在を確認することができた。調査対象地における戦災樹および防空緑地の現状について明らかにすることができたが、(4)(5)の分布図および保全マップの作成、保全方法の検討は、まだ十分になされたとはいえない。今後は、本助成

により得られた調査結果をもとに更なる分析を加え、戦災の痕跡を残す緑地環境の保全活用について新たな知見を得ることを検討している。